新　星　雑　記

桑　野　善　之*

新星のパトロールを始めたのが，1968年7月でしたから，今年で丁度10年目に入ることになります．

初めの頃は写真の撮り方もよくわからず，なかなか要領を得ませんでしたが，試行錯誤の末どうにか新星現象をキャッチすることができるようになりました．特にここ4年間毎年1個ずつ検出できたのは，全く幸運なことだと思っていますが，パトロール開始以来，東京天文台の香西先生はじめ多くの方々にご迷惑をおかけしており，新星が自分一人の所産でないことを痛感いたしております．

年間のパトロール回数は40回～50回といったところですが，現在おかれているさまざまな条件からみて，精一杯の所だと思っています．黒点観測のように，雲の切れ間から，あるいは絹雲ごしに観測などという無理はできません．雲の殆どない夜で，しかも月明りのない夜といえば，一カ月のうち4，5日がよい所です．その上日田という所は，秋から冬にかけて霧の発生が多くいつも悩むところです．

話は変りますが，ここで私の住む町をご紹介しましょう．私の住む大分県日田(ひた)市は，小京都と呼ばれる町の一つで，山に囲まれた盆地の中央を三隈(みくま)川(筑後川の上流)が流れ，林業の盛んな町です．かつて豊臣・徳川時代の頃には，西国郡代の置かれた天領の町として栄えた所で，今も町の所々に当時の面影を残しております．最近出版された「西海道談綺」(松本清張)は，日田を舞台にした長編小説で，図書館でも人気上々の小説です．

江戸時代後期日田出身の広瀬淡窓(たんそう)(1782～1856)は私塾咸宜園(かんぎえん)を開き，全国各地から数多くの入門者を迎えましたが，その数は4300名に達すると記録されています．今に残る入門簿の中には，NHK TVドラマ花神の大村益次郎，上野彦馬，横田国臣，清浦奎吾，朝吹英次等々の名前も見えます．この咸宜園址は日田の観光コースの最初にあげられていて，連日多くの見学者で賑わっています．当時の蔵書「咸宜園蔵書」の中には，「昊天図説詳解」(河東田渾沌斎・文政7年)，「仏国暦象編」(円通編・文化7年)，「算法便覧」(武田真元・天保11年)などの書物もあり，合計約5000冊の蔵書が残されています．そのほか広瀬家には，淡窓の万善簿・日記・著作など沢山の資料が大切に保存されています．

この偉大な学者広瀬淡窓の遺徳をしのび，ゆかりの地に建ったのが，淡窓図書館で大正5年4月に開館し，現在多くの方々に利用されている所であります．

この図書館から東へ5kmほど離れた山の中に，昭和29年以来私は住みつき，空を眺めているわけですが，さすがに中心地から離れているため，天王星も肉眼で可能ですし，金星も最大光輝の前後かなりの期間肉眼で見えております．ただ周囲に山があるため，低空の星は見にくく，カノープスを見ようと思えば，近くの段々畑の上にのぼらねばなりません．それに，電線がパトロール写真に必ず入りいつも苦労している所です．望遠鏡をあちこち移動して写しているのですが，低空の射手・さそりではまずさけられない所です．

こんな時に車でもあれば，展望のきいた久住高原あたりまで遠征し，思う存分撮りたいところですが，車の運転ができないのですからあきらめるほかありません．しかし，自分の家の前から5個の星が見つかったのですから，ぜいたくは云えないとも思ったりします．与えられた空を精一杯活用する以外に手はありません．

昨年9月蛇遣座に新星が見つかってから，丁度半年で射手座新星が見つかり，今までの自分の例では，最短期間になりました．私に何かと声をかけて下さる地元の方の中には，今年中にもう一個位見つかるかも知れないなどと，応援して下さるのですが，こればかりはやってみないことにはどうなるかわからず，せいぜい努力してみますと答えるほかありません．中には，6個目はぜひ地上の星を発見しなさいなどと，強くすすめて下さる人もいますが，本当はこの方がむずかしいかも知れません．なんでも東京の方にも，私などよりはるかに先輩の方がおられるそうで，あまり気にすることもなさそうです．

新星のパトロールを年間40～50回，沢山ある星の中から，年に1個程度の星を探し出すのですから，相当時間を要するわけですが，外から見るほどむずかしいものではなく，結構楽しみながら続けています．

この10年間愛用してきたf 55 m/m，F 1.2のレンズを，f 58 m/m，F 1.2というレンズに代えてみました．まだ数回しか使っていませんが，かなり星像は良好のようです．星図と照合の際は，やはり収差の少ないレンズの方がうまく出来ますし，第一気持ちがよいものです．これから先どんな新星が出現するかわかりませんが，白鳥座新星の出現時のような興奮をもう一度味わいたいものだと思っています．

* 大分県日田市立淡窓図書館